

〔解答〕

- 1 家具や (2) B:オ・D:イ(完答) (3) 無人  
 a:若者の法則(若者ルール)・b:社会全体のものではない(完答)  
 理性や意志の力、ある種のトレーニングが必要だから(例) (6) ウ  
 (4) (1) (7) エ (8) ア  
 (2) B:ウ・C:イ(完答) (3) a:落・b:縁(完答)  
 (4) (1) (7) エ (8) ア  
 (2) B:ウ・C:イ(完答) (3) a:落・b:縁(完答)  
 (4) (1) (7) エ (8) ア

〔解説〕

1

(1) 「仲間以外はみな風景」とは、「自分のすぐ横にいる仲間や友だち以外は電柱やガードレールなどの風景にしか映っていない」という「若者の法則」である。同じ感じ方を、②段落で「家具や植木鉢と同じ車両に」という感覚」と表現している。

(2) Bは前の内容があとの内容の理由になっていることから、Dは前後の内容が対立していることから考える。

◆オの「だから」は順接、イの「しかし」は逆接の接続詞。

(3) 「傍若無人」とは、「人のことを気にかけず、勝手気ままに振る舞うこと」という意味の四字熟語である。

◆類義語は「得手勝手」。四字熟語は出題されやすい。一つでも多く覚えよう！

(4) 「そのギャップ」の指す内容は、「『若者の法則』は若者が勝手に決めてしまったもので、社会全体のものではない」ために、若者の行動が、大人にとっては不愉快に感じられるということである。

◆「その」などの指示語が指す内容は、前の文にある！

(5) ⑥・⑦段落の内容に注目する。⑦段落の最後に、「他人をまったく意識しないという若者ルールの実行には、大人ルール以上の理性や意志の力、ある種のトレーニングが必要」だと述べられている。

◆理由を問われているので、「から」「ため」などの理由を表す言葉を文末につけることを忘れないように注意してまとめろ。

◆まず「自分も他人を意識しない」ことが書かれた内容を探そう。論説文は、重要な語句(キーワード)に着目して読むと文章を理解しやすい。

(6) 傍線部の「で」は場所を表す格助詞。アは形容動詞「面倒だ」の連用形語尾。イは断定の助動詞「だ」の連用形。ウは手段を表す格助詞。エは伝聞を表す助動詞「そうだ」の連用形語尾。

◆格助詞(が、の、に、へ、と、で、より、から)は主に体言や体言に準ずるものについて、主語や修飾語の文節を作る。付属語なので活用はない。

(7) ③段落は、①・②段落で説明された内容についての問題点を示しているのでアは不適。④段落は、①～③段落の内容を受けて、新たな問題を提示しているのでイも不適。⑤段落は、④段落で提示された問題に対する筆者の考えを述べているのでウも不適。

論説文を読むポイント

- 重要な語句(キーワード)に着目する。
- キーワードが文章中でどのように使われているか。
- 抽象的な表現の語句とその具体例を挙げている部分との関係を考える。

(1) 「わななく」は、ここでは「緊張などのためにわなな震える」という意味。「え吹かざりけり」は、「吹くことができなかつた」という不可能の意味を表す。

◆「え」は下に打消や反語表現を伴うと「とてもうできない」、下に肯定の表現を伴うと「うまくうできる」となる。

(2) Bは、堀河院に「私に坪の辺りに呼びて、吹かせよ（＝個人的に坪庭の辺りに呼び出して、笛を吹かせなさい）」と命じられ、明宗と約束を交わして、笛を吹かせた人物なので、「女房」がふさわしい。Cは、思うままに笛を吹いていたのを堀河院に聞かれていたことに気づき、心が縮み上がった人物なので、「明宗」の動作だと考えられる。

(3) 明宗は、堀河院に笛の演奏を聞かされていたことに気づき、慌てふためいて「縁より落ちにけり（＝縁から庭に転げ落ちてしまった）」とあるので、「楽塩」の読みと「落縁」を掛けて、「安楽塩」というあだ名が付けられたのである。

(4) 語頭と助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、「わ・い・う・え・お」に直す。

(5) この文章では、緊張のあまり取り乱し、失敗してしまった人々のことが書かれており、筆者は、そのようなことは昔からよくあることだったと述べている。

## 文法チェック

● いとどこそめでたけれ

・係助詞「こそ」→強調

・結びの語→「めでたし」の已然形「めでたけれ」

## 【現代語訳】

堀河院の御代に、勘解由次官明宗といつて、すばらしい笛の奏者がいた。（明宗は）ひどい気おくれをしよう人であった。院が、笛をお聞きになろうと思つて、（明宗を）お呼びになつたところ、帝の御前だと思つと、気おくれして、震えて、吹くことができなかつた。

（帝は）残念だと思つて、（明宗と）親しい女房にお命じになつて、「個人的に、部屋の近くに呼び出して、吹かせよ。」とおつしやつたので、（女房は）月の夜に、話して約束して、吹かせた。  
（明宗は）女房が聞いていると思つと、気おくれすることなく、思うままに吹いた、その音色は、この世に比類なく、すばらしかつた。

帝は、感動を抑えることがおできにならない。日ごろも上手だとはお聞きになつてしたが、これほどすぐれているとはお思いにならなかつた。「全くもつてすばらしい。」とおつしやつたところ、「さては、帝がお聞きになつていたのだよ。」と、たちまちに気おくれして、騒いでいたうちに、縁から落ちてしまった。そのことから、「安楽塩（あめ落縁）」というあだ名がついてしまった。

昔、秦舞陽が始皇帝を見申し上げて、顔色が変わり、身震いしていたのは、暗殺しようという気持ちを抑えきれなかつたからであつた。明宗は、どうして、そんなにあわてふためいたのだらうと思つと、おかしい。

天徳の歌合せに源博雅が和歌を詠みあげる講師をつとめた時、ある歌を詠み間違えて、顔色が変わり声が震えたときその記録にある。

緊張しすぎたため冷静さを失い失敗するということは、昔の立派な人でも力の及ばないことである。

## ポイント

- \* 登場人物や、だいたいのストーリーを押さえる。
- \* 明宗の性格や行動を考える。
- \* 「安楽塩」というあだ名の意味を考える。
- \* 堀河院の行動の意図を考える。